

T20210731\_02\_OIF

OIF、800G に対処する広帯域コヒレントドライバ変調器 2.0 実装合意

OIF は、高帯域コヒレントドライバ変調器(HB-CDM) 2.0 についての実装合意(IA) を発表した。この IA は、2018 年 11 月に発表された HB-CDM1.0 に立脚し、同じフォームファクタを利用する。

HB-CDM 2.0 は、次世代のコンパクト、高性能コヒレントネットワーキングソリューションを可能にする OIF の集積レーザとコヒレントレシーバ標準に従う。OIF の HB-CDM 1.0 は、64 Gbaud のリリースであり、400Gbps コヒレントシステムを可能にするものであり、市場は、ネットワーク容量とパフォーマンスの拡大を必要としていた。HB-CDM 2.0 は、既存システムとの互換性のために元の Type 1 フォームファクタを利用し、代替インタフェースとしてフレキシブルプリント回路(FPC)およびパフォーマンス向上 RF ピッチオプションを含む。目的は、将来システムの拡張レート。

「OIF の HB-CDM 1.0 標準は、最適化された 400G+メトロおよび長距離(LH)コヒレントネットワークを可能にする重要な新規構成要素であり、標準化されたフットプリント、インタフェースとパフォーマンスで大容量化を必要とする業界をサポートするものであった」と OIF HB-CDM 2.0 IA、Intel の Richard Ward は説明している。「HB-CDM 2.0 は、自然な流れであり、波長当たり 800G およびそれ以上のシステムのためにコヒレント技術で 128GBd をカバーする。市場の要求は、業界要件を満たすソリューションを実現し、光ネットワーキング技術の市場普及を促進する OIF の重要な役割を強めるものである」と同氏は続けている。